生活科における「食育」の扱い方に関する一考察

梶田尚吾
（愛知教育大学大学院　教育学研究科）

A Consideration about a use of "Food Education" in Living Environment Studies

Shogo KAJITA
(Graduate Student, Aichi University of Education)

Ⅰ　研究の目的

平成20年版小学校学習指導要領の第1章「総則」には「学校における食育の推進」という文言が明記された[1)]。「食育」が，現代の学校現場において重要視されていることが分かる。また，2011年3月に出された「第2次食育推進基本計画」には，「子どものころに身に付いた食習慣を大人になって改めることは困難であり，子どものうちに健全な食生活を確立することは，（中略）生涯にわたって健全な心身を培い，豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となる。」[2)]とある。これより，「食育」は，子どもが食生活を確立する前から行われなければならないと考えられ，小学校低学年段階における食育の重要性がいえる。

小学校学習指導要領第2章第5節「生活」には，直接「食育」という言葉は記載されていないものの，生活科の目標について，「（前略）生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ，自立への基礎を養う。」[3)]と規定している。こうした目標を持つ生活科において，「規則正しい食生活」という，生活上必要な習慣を身に付けることにつながる「食育」を扱うことは，価値があると考える。また，学習指導要領解説生活編に「身近な自然を観察するとは，（中略）諸感覚を使って繰り返し自然に触れ合うこと（中略）などである。」[4)]とあるように，生活科では，諸感覚を使って対象に触れ合うことが重要視されている。しかし，諸感覚の1つである「味覚」を，授業の中で児童が使えるようにするには，その場面を教師が特別に設定する必要があり，そのために，「食育」を扱うことは適切であると考えた。さらに，生活科は学習指導要領改訂の基本方針の1つとして，「生命の尊さを実感する学習活動を充実する。」[5)]ことを挙げている。「食」に関わる中で，食べ物の命をいただいていることに気付くことが，生命の尊さの実感につながると考えられる。これらのことから，生活科において，「食育」を行うことには，意義があると考えた。

しかし，ただ「食育」を行うといっても，「食育」が目標としている資質・能力は実に多様である。足立己幸ら（2005）は，「2000年代に入って，現代の食育は，食をめぐる様々な取り組みや教育がくくられて使用されるようになった（中略）食育の推進方法が先んじて，食育の概念やねらいなどについて不鮮明だという指摘も少なくない」[6)]などと述べている。その指摘通りに，例えば，愛知県が作成した「あいち食育いきいきプラン2015」を見ると，学校現場で取り組むべき，食育に関する事項が，何項目にもわたり，数多く挙げられている[7)]。その中の，どのような資質・能力を育てていくことを，生活科で行う「食育」では目指していくべきなのか。その疑問を解決するために，文部科学省発行の「食に関する指導の手引き」を見ると，「第3章　各教科等における食に関する指導の展開」の「生活」の欄には，そのねらいとして，「食事や睡眠などに関する習慣や技能を身に付ける」「食の安全や命の大切さについて考えます。」「食に関する理解を，より身近に実感をもって深める」「いろいろな食べ物の名前が分かり」「地域の気候風土と，特産の食材との関連について気付く。」などといったことが記されている[8)]。どの視点も，目指していきたい点ではあるが，ここでも，目標とする資質・能力が非常に多様であり，まずどこを目指していけば良いのか，重点を置けばよいのかがはっきりとしない。

そこで，本研究では，小学校の生活科主任の教師

を対象に，意識調査を行い，その結果を基にして，生活科で「食育」を扱う際には，「食育」が目標としている，どのような資質・能力の育成を目指していくべきなのかを考察していく。また，生活科で「食育」を扱っていく方法についても，同時に考察していく。

Ⅱ　調査概要

調査対象：主に生活科研究主任の教諭（計 167 名）
調査方法：質問紙調査（質問紙は資料を参照）
調査内容：学校現場における「食育」の実態調査
　　教師の「食育」に対する意識調査
調査日程：(いずれも 2011 年)
11 月 2 日千葉県教育研究会生活科教育研究協議会東総大会（60 名）
11 月 29 日愛知県碧南市生活科授業研究会（15 名）
12 月 1 日愛知県西尾市生活科授業研究会（24 名）
12 月 6 日愛知県豊田市生活科研究会講演会(68 名)

Ⅲ　調査結果と考察

1　教師が重要視する，現代の子どもが抱えている食に関する問題点について

「Ⅰ研究の目的」でも述べたように，単に「食育」といっても，その課題は数多くある。そして，すべての課題に対して平均的に取り組むということは難しいと考えられる。そこで，子どもの実態を詳しく知っている現場の教師が，食に関する子どもたちのどのような態度を特に問題視しているのか，調査を行った。なお，質問項目は，「第２次食育推進基本計画」の「食をめぐる現状」，「今後の展開」，「重点課題」の項を参考に作成した[9]。質問内容，質問項目，調査結果は以下の通りである。

> 質問１　現代の子どもたちが抱えているといわれる以下の食に関する問題について，特に問題だと思うものを３つ選んで，(　) のなかに○を記入して下さい。

表１　質問１「教師が重要視する現代の子どもが抱えている食に関する問題点」調査結果（167 人中）

質問項目	回答者数	回答割合
①　朝食を毎日きちんととっていない。	39 人	23.4%
②　食事の栄養バランスが悪い。	59 人	35.3%
③　食事を平気で残す。	93 人	55.7%
④　食事のマナーが悪い。	66 人	39.5%
⑤　食事に感謝の気持ちを持っていない。	49 人	29.3%
⑥　好き嫌いが多い。	104 人	62.3%
⑦　他人と一緒に食卓を囲む機会が少ない。(孤食の問題)	26 人	15.6%
⑧　食べ過ぎ，食べなさ過ぎである子どもが多い。	49 人	29.3%
⑨　食に関する知識が不足している。	19 人	11.4%

表１より，教師が特に問題点だと考えていることが多かった項目は，「③　食事を平気で残す。」と「⑥好き嫌いが多い。」の２つであった。この２項目に関しては，それぞれ半数以上の教師が，特に問題だと思う点３つのうちの１つに挙げていた。子どもたちが給食を食べている様子を普段見ている教師たちが，③⑥のようなことを問題視しているということは，給食の時間に「好き嫌いが多く」，その結果として「食事を平気で残す」子どもが多いということがいえるのではないか。この問題を解決するためには，「食」へと多方面から触れることで，その良さや大切さを感じることが必要であると考えられる。生活科で食育を行う際も，結果としてこうした問題が解決していけばよいといえる。

逆に，「⑦　他人と一緒に食卓を囲む機会が少ない。(孤食の問題)」「⑨　食に関する知識が不足している。」という問題点を挙げた教師は，どちらの項目に対しても 10%台と，比較的に少ないという結果となった。⑦を挙げた教師が少なかったことに関しては，給食で友達と一緒に食事を取っている姿を見ているため，あまり問題としなかった可能性も考えられる。そうであったとすれば，家では１人で食事をとって

いる子どもにとって，給食という場で，友達と一緒に毎日食事をとることは，とても有意義なことであるといえる。⑨を特に問題であるとした教師が少なかった点については，食に関する知識は家庭科や体育科（保健分野）の授業で必ず教えるため，そこまで問題視していないといった理由が考えられる。生活科のなかで食育を行う場合において，単に食に関する知識をつけさせることだけを目指しても，その価値は低いといえるのではないか。

2　食育で育んでいく資質・能力をそれぞれどの教科等で育てていくべきか

学校教育のなかで「食育」を通してどのような資質・能力を育んでいくのか，ということについては，多数の行政機関が方針を出している。しかし，それは生活科だけを通して行うのではなく，家庭科や体育科などの各教科，給食の時間など，学校教育全体を通して取り組んでいく課題である。そのため，生活科で「食育」のどのような資質・能力を育んでいくべきかを考えた場合，他教科等との関係も考えていく必要がある。そこで，学校教育で，育んでいくべきだとされている資質・能力を 12 項目取り上げ，それぞれどの教科等で育んでいくべきだと考えているのか，教師の意識調査を行った。

質問項目は，「あいち食育いきいきプラン 2015」において学校が取り組むべき課題として挙げられているものと[10]，「第２次食育推進基本計画」の「学校，保育所等における食育の推進」の「取り組むべき施策」の項に挙げられている事項から[11]，12 項目を取り上げ作成した。なお，文部科学省「食に関する指導の手引き」で目標として挙げられている６点（「食事の重要性」（重要性），「心身の健康」（健康），「食品を選択する能力」（選択），「感謝の心」（感謝），「社会性」（社会性），「食文化」（食文化））に，それぞれ２項目ずつが対応するように取り上げている[12]。質問内容，質問項目，調査結果は以下の通りである。

> 質問２　下の①～⑫の食に関する能力・資質は，学校教育全体の中で，特にどの授業や時間に育んでいくべきだと考えますか。当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

表２　質問２「食育で育んでいく資質・能力をそれぞれどの教科等で育てていくべきか」調査結果

質問項目	生活	家庭	体育	社会	総合	給食
①栄養バランスのとれた食事をとることができる。（健康）	19%	84%	36%	0%	11%	74%
②規則正しい食生活を実践できる。（重要性）	22%	66%	37%	0%	10%	53%
③生活習慣病や過度な肥満・痩身等を予防できる。（健康）	7%	35%	86%	0%	11%	32%
④食の安全性について考えることができる。（選択）	6%	75%	16%	26%	37%	33%
⑤食事を楽しむことができる。（重要性）	44%	50%	3%	1%	19%	93%
⑥食事を通して他人と交流することができる。（社会性）	44%	46%	1%	2%	37%	83%
⑦食文化の大切さを理解することができる。（食文化）	18%	50%	5%	32%	57%	38%
⑧食事のマナーを守ることができる。（社会性）	14%	38%	1%	0%	12%	94%
⑨食生活において「もったいない」意識を持つ。（感謝）	38%	46%	2%	16%	39%	80%
⑩地産地消に対する関心を持つ。（食文化）	26%	41%	1%	56%	56%	56%
⑪食に対する感謝の念を持つ。（感謝）	52%	44%	4%	14%	36%	82%
⑫食物の生産・流通・消費に対する関心を持つ。（選択）	13%	31%	1%	83%	45%	25%

表２から，特に多くの教師が挙げた，各教科で育てるべき資質・能力は，家庭科では，「①栄養バランスのとれた食事をとることができる」，「②規則正しい食生活を実践できる」，「④食の安全性について考えることができる」，の３項目。体育科では，「③生活習慣病や過度な肥満・痩身等を予防できる」，社会科では，「⑫食物の生産・流通・消費に対する関心を持つ」，のそれぞれ１項目。給食では，「①栄養バランスのとれた食事をとることができる」，「⑤食事を楽しむことができる」，「⑥食事を通して他人と交流

することができる」，「⑧食事のマナーを守ることができる」，「⑨食生活において『もったいない』意識を持つ」，「⑪食に対する感謝の念を持つ」，の６項目となった。また，総合的な学習では，「⑦食文化の大切さを理解することができる」，「⑩地産地消に対する関心を持つ」といったような，知識を身に付けることに関わる項目の割合が比較的高かった。ここから，各教科と総合的な学習の時間では，授業の中で，食に関する知識を学ぶことと，その学んだ知識をもとに望ましい食生活を送ることが重要視されているといえる。給食では実際に食べることを通して，食に対する心情を養い，望ましい食生活につなげることが重要視されているといえる。

学校教育全体を見ていくと以上のような結果となったが，表２から生活科の結果だけを抜き出し，生活科で食育を行う際に，育てていくべき資質・能力を考察していく。それを抜き出したものが，図１である。

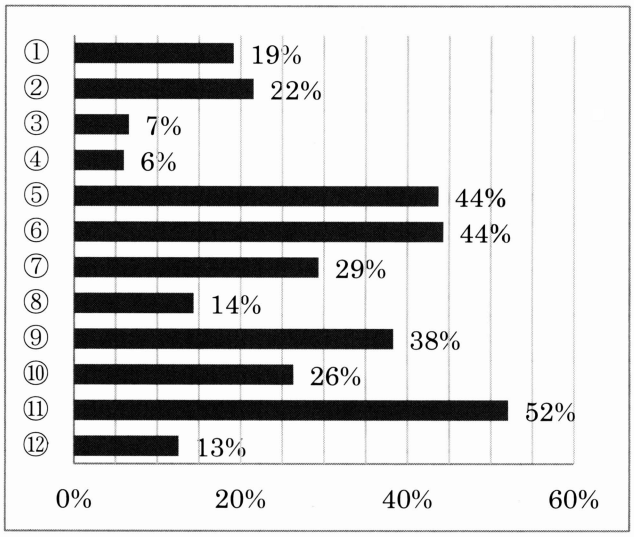

図１　質問２「生活科では，食育で育んでいくどの資質・能力を育てていくべきか」調査結果（質問項目は表２と同様）

図１から，生活科における食育では，「⑤食事を楽しむことができる」，「⑥食事を通して他人と交流することができる」，「⑨食生活において「もったいない」意識を持つ」，「⑪食に対する感謝の念を持つ」，といった点について，育てていくべきだと考えている教師が多かったことが分かる。

上記の高い割合を示した資質・能力を見ていくと，心情面や，その心情に基づいての行動面の項目が挙げられていることが分かる。逆に，知識を身につけるものや，知識をもとにして行動していく項目を挙げた教師は少ないという結果になった。生活科における食育では，食に関する望ましい心情を育てること，そして，その心情を実際の行動で表現できるようにすることが，求められているように考えられる。

３　生活科における「食育」の実態

続いて，生活科における「食育」の実態はどのようになっているのか調査を行った。調査内容は次の３点である。

①実際に生活科の授業において食育はどの程度行われているのか。

②行われる際には，生活科のどの内容において行われているのか。

③生活科で「食育」を扱うことで，生活科自体が目標としていることを，どの程度達成することができたのか。

それぞれの結果と考察は以下の通りである。

（１）生活科の授業において食育はどの程度行われているのか。

始めに，調査対象である教師の，生活科における食育の授業経験の有無を問うことで，どの程度生活科で「食育」が扱われているか調査した。なお，調査対象である教師の生活科を担当した年数は不明であるが，すべての調査対象が，必ず１度は生活科の担当をしている。質問内容と結果は以下の通りである。

質問３　生活科での食育に関する授業経験についてお聞きします。 問１．生活科で食育に関する授業を行ったことがありますか。

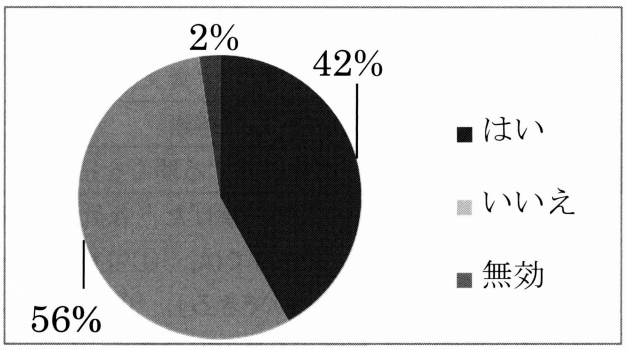

図２　質問３－１「生活科における食育に関する授業経験の有無」調査結果

図２を見ると，「いいえ」と答えた教師が 56％となっており，半数を超えていることが分かる。この結果から，実際の生活科の授業では，あまり食育を意識した授業は行われていないということがいえる。また，先ほどの質問２の中で，食に関する資質・能力の一部を生活科で育てていくべきであると回答していたにも関わらず，実際に生活科で食育に関する授業を行ったことがないと回答した教師も多数存在していた。生活科の授業で食育を行っていきたいと考えてはいるものの，実行できていないという教師が少なからず存在していると考えられる。生活科で，どのように「食育」を扱っていけばよいのか，その方法論を提示することで，状況の改善ができるのではないだろうか。

（２）生活科のどの内容において，「食育」は行われているのか。

続いて，生活科のどの内容において「食育」が行われているのか，現状を知るための質問を行った。なお，回答者は，先の質問３―問１に対して，「授業経験がある」と回答した者に限定している。また，質問項目は，「小学校学習指導要領解説生活編」の「生活科の内容」から抜粋して作成した[13]。質問内容と調査結果は以下の通りである。

質問３問２．食育に関する授業を行ったことがある生活科の内容は何ですか。当てはまるすべてに○をつけて下さい。

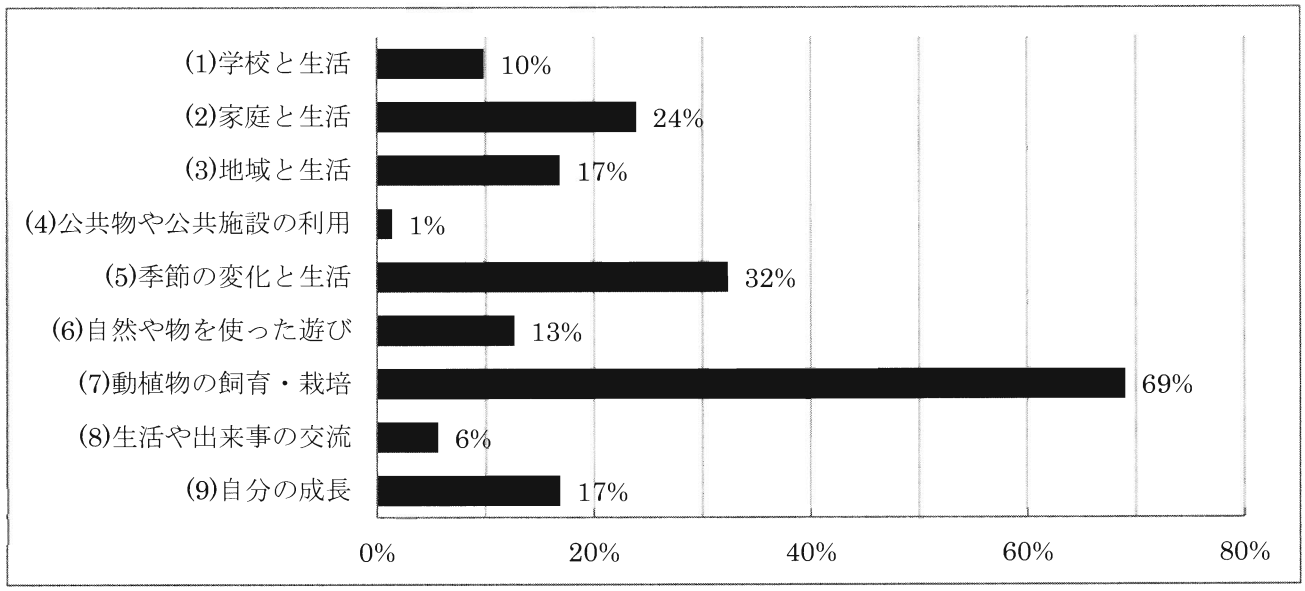

図３　質問３－２「生活科のどの内容で食育を行った経験があるか」調査結果

図３から，生活科において「食育」を行うとき，内容（７）「動植物の飼育・栽培」で行われる場合が，非常に多いということが分かる。生活科で「食育」の授業を経験したことがある教員の７割近くが，この内容で活動を行っていると回答している。確かに，野菜を栽培して，育てた野菜を食べるという実践は数多く行われており，その効果も証明されていることから，これは妥当な結果であったといえる。

しかし，一方で，内容（１）「学校と生活」や内容（３）「地域と生活」，内容（９）「自分の成長」において，食育に関する授業を行ったことがあると回答した割合が少なかった。この３つの内容について，「食育」を行ったことがあると回答した教師は，それぞれ２割に到達していない。しかし，学校や地域において，子どもたちの食生活を支えている人やものが存在している場合は多いと思われる。また，「食べること」は，子どもたちの成長と大きく関わっている。そうしたものを教材として，食育の授業を行っていくことで，子どもたちの中に，「食」に対する，新たな視点が生まれるのではないだろうか。それにより，内容（７）からだけでは得ることのできない，「食育」が目標としている資質・能力の育成ができ，より充実した食育となっていくのではないかと考えた。

また，内容（8）「生活や出来事の交流」において，食育に関する授業を行ったことがあると回答した教師の割合は，6％と非常に少なかった。内容（8）は，平成20年度版の学習指導要領で新設されたものであるため，授業を行った回数が少ないという結果は当然であるといえる。しかし，根本裕美（2008）は，内容（8）について，「他の内容との関連を図り，単元を構成していくことも，この内容の充実には欠かすことができない」[14]と述べている。他の内容で「食」に関わったことを生かし，内容（8）においても，「食育」を扱っていくことが，今後増えていけば良いと考える。

（3）生活科で「食育」を扱うことで，生活科自体が目標としていることを，どの程度達成することができたのか。

最後に，生活科の授業において「食育」を行うことで，生活科自体が目標としていることを，どの程度達成することができたのか，調査を行った。「食育」が目標としている，資質・能力を子どもたちが獲得することができても，生活科が目標としていることに対して効果がなければ，教科である生活科の授業としての価値は低くなってしまうと考える。

そこで，「食育」を生活科で行うことで，生活科の目指す内容を達成することができたのかを調査した。なお，回答者は，先ほどと同様に，質問３―問１に対して，「授業経験がある」と回答した者に限定している。また，質問項目は，「小学校学習指導要領解説生活編」の「内容構成の具体的な視点」から，「食育」を扱うことで，効果がありそうな項目を選び，作成した[15]。質問内容と，調査項目，調査内容は以下に記述する通りである。

質問３問３．生活科で食育に関する授業を行うことで，子どもたちにどのような変化が見られましたか。以下①～⑦の質問に対して，当てはまるもの１つに○をつけて下さい。

＜質問項目＞
①健康や安全に気をつけて，規則正しい生活をすることができるようになった。
②地域の人々や場所に愛着を持つことができるようになった。
③マナーに気を使うことができるようになった。
④自然との触れ合いを深め，生命を大切にすることができるようになった。
⑤季節の移り変わりを生かして，生活を楽しくしたりすることができるようになった。
⑥自分の成長への喜びを感じ，支えてくれた人々に感謝の気持ちを持てるようになった。
⑦日常生活に必要な習慣や技能を身に付けることができるようになった。

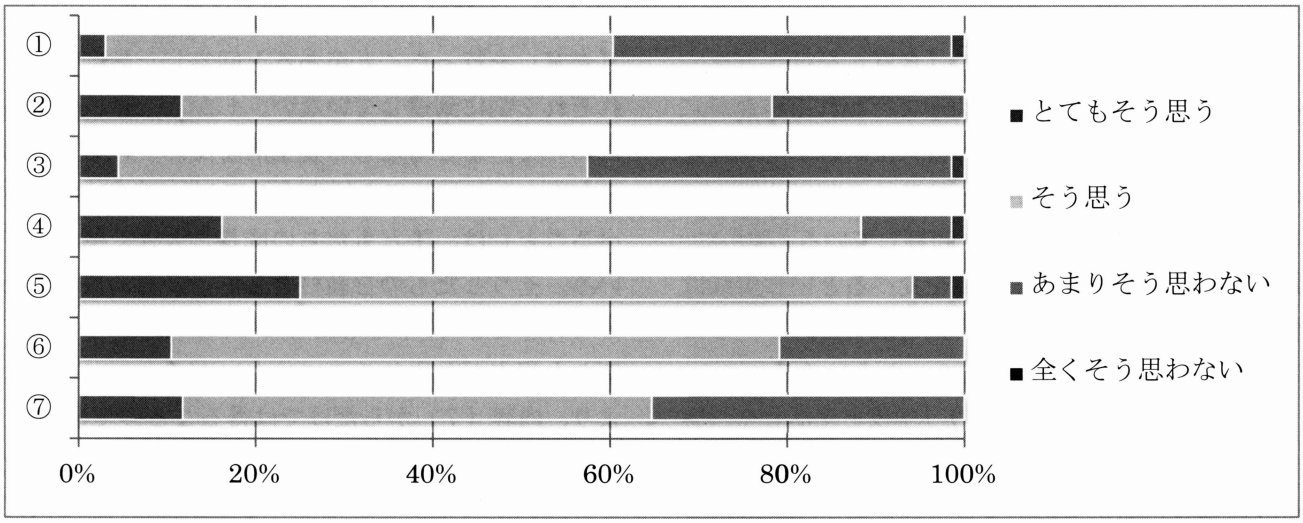

図４　質問３－３「生活科で食育に関する授業を行うことで，子どもたちに見られた変化」調査結果

図４より，全体的に，「とてもそう思う」，もしくは「そう思う」，と回答した教師の割合が高くなっており，合計すると，質問した項目のすべてで，ほぼ60％以上の教師がそのように回答している。このことから，生活科の中で「食育」を扱うことには価値があると考えられる。

特に，「④自然との触れ合いを深め，生命を大切にすることができるようになった。」と「⑤季節の移り変わりを生かして，生活を楽しくしたりすることができるようになった。」という２つの点については，多数の教師が「とてもそう思う」，もしくは「そう思う」と回答した。２つの回答を合計すると，80％を超えている。これは，質問３－問２の結果から分かるように，生活科で「食育」を行う際に，内容（７）「動植物の飼育・栽培」や，内容（５）「季節の変化と生活」において行われることが多いということと関連していると考えられる。質問項目④の視点は内容（７）と，質問項目⑤の視点は内容（５）と密接にかかわっているためであり，妥当な結果であるといえる。

また，「②地域の人々や場所に愛着を持つことができるようになった。」と「⑥自分の成長への喜びを感じ，支えてくれた人々に感謝の気持ちを持てるようになった。」の２項目についても，８割近くの教師が，「とてもそう思う」，もしくは「そう思う」，と回答しており，一定の効果があったと考えられる。②の視点は，生活科の内容（３）「地域と生活」，⑥の視点は，内容（９）「自分の成長」と深く関わっているものである。質問３－問２の結果から，この２つの内容において食育はあまり行われていないことが明らかになった。しかし，それにもかかわらず，この２つの視点で，変化が見られたということは，２つの視点と関わりのある，内容（３）と（９）においても，より積極的に「食育」を取り扱うべきだといえるのではないかと考えた。

一方で，①，③，⑦の視点については，「あまりそう思わない」，もしくは「全くそう思わない」と回答した教師が４割ほどおり，これらの視点に関してはあまり効果を感じることのできなかった教師が多かったことが分かる。しかし，特に「①健康や安全に気をつけて，規則正しい生活をすることができるようになった。」と，「⑦日常生活に必要な習慣や技能を身に付けることができるようになった。」という視点については，「子どもたちが，規則正しい食生活，望ましい食習慣，を送ることができるようになる」という「食育」の取り組むべき課題と，共通の部分であるといえる。そのため，これらの課題については改善が求められる。生活科で「食育」を行うときには，子どもたちの日常生活につながるような配慮が必要であると考える。

Ⅳ　調査結果のまとめ

これまで，生活科における「食育」に関する意識調査の結果を考察してきた。それにより，「食育」に対する教師の意識や，小学校の現場で，「食育」がどのように行われているのかといった，活動の実態が明らかになってきた。そこで，こうした事実を踏まえつつ，生活科で「食育」を行う場合に，どのような資質・能力の育成を目指していくべきなのか，また，どのように行っていくべきなのかを考察していく。

まず，生活科における「食育」で，「食育」が目標としているどのような資質・能力を育てていくことを目指すのか，という点についてである。質問２では，「食育」が目標としている資質・能力について，それぞれ，生活科も含めた各教科等のなかで，どのように育てていくべきだと考えているのか，教師の意識調査を行った。その結果から，生活科においては，食に関する知識を身につけることを目的とするのではなく，食に対する望ましい心情を育て，それに基づいて望ましい食生活を送ることができるようになることを目的としていくべきではないかと考えた。

学校教育全体を通して「食育」を見た場合，食に関する知識は，家庭科や体育科といった教科などで必ず教えることになっている。この２つの教科については，学習指導要領でも規定されていることから，明らかである[16]。そのため，食に関する知識を無理に生活科で教える必要はないということが考えられる。また，そうした教科で知識を教えるように規定しているのは，中学年や高学年になってからである。それは，低学年の段階では，子どもたちがそうした知識を理解することがまだ難しいからではないだろうか。

また，質問１の調査結果から，現場の教師は「食に関する知識が不足している」という課題については，あまり問題意識を抱いていないことが明らかになった。以上のような点も踏まえて，生活科で「食育」を扱う際に，単に食に関する知識を身につけることを，あまり意識しなくてもよいと考える。大田原みどり（2011）は，低学年の食育に関して，「食品や栄養のことを中心に学習を進めることが多かった。しかし，子どもたちにとっては実感が伴っていなかったかもしれない。学習後は意識できていても，時間の経過とともに薄れていく」[17]，と述べている。このことからも，生活科では，単に食品や栄養に関する知識を理解することを目標とするべきではないといえる。

そこで，食に対する望ましい心情を育てることを，まずは重視していくべきであると考えた。食べることの楽しさや重要性を感じたり，食に対する感謝の気持ちをもったりすることは，重要事項であり，「食育」の基礎になる部分だと考える。こうした心情が育まれていないと，太田原が述べていたように，望ましい食習慣や食に対する知識が，子どもたちのなかに定着していかないのではないだろうか。低学年の間に，食に対して望ましい心情を確実に育てておくことが，その後の食に関する知識や習慣を身につける際に役に立つと考えられる。（図５参照）

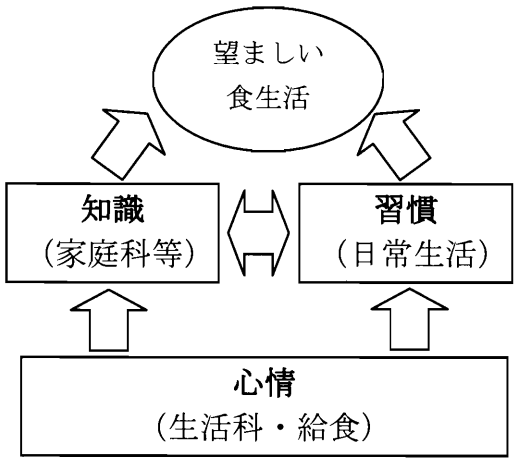

図５　食育の進め方

こうしたことから，生活科における「食育」で育てていく資質・能力を，「食事の楽しさ，食べ物の大切さを感じ，食に感謝の気持ちを持てるようにすること」とする。また，こうした資質・能力を育てていくことで，質問１の結果より，現場の教師が特に問題視していることが分かった，「食事を平気で残す」「好き嫌いが多い」といったような，食習慣に対する課題が解決していけばよいと考える。たとえ，食に対して望ましい心情を持っていたとしても，実際の行動に表れてこなくては，その価値は半減してしまうであろう。質問３―問３からは，「日常生活に必要な習慣や技能を身に付けることができるようになった。」という視点については，生活科で「食育」に関する授業を行っても，子どもたちにあまり変化はなかったという結果が出た。この現状を変えて，生活科で「食育」に取り組むことが，日常生活における望ましい食習慣を身につけることにつながるようにしたいと考える。

次に，生活科で「食育」をどのように行っていくかについてである。（図６参照）先に述べたように，生活科における食育の目的を「食事の楽しさ，食べ物の大切さを感じ，食に感謝の気持ちを持てるようにすること」とした。これを達成するためには，実際に「食」に関する活動を体験したり，「食」に関するものに触れたり，関わる人と触れあうということが大切であるといえる。そうすることで，子どもたちの中に，「食」に対する新たな気付きが生まれてくるのではないか。日常生活の中で，子どもたちは自然と「食」に関わってはいる。そこに，生活科の授業で，「食」に対する新たな見方を与えることにより，目指すべき資質・能力の育成につながると考える。

その時に，質問３―問３の結果からも述べたように，栽培の内容だけに限定するのではなく，いろいろな内容において，「食」に関わる活動を行っていくことが有効であると考える。それにより，子どもの中で，「食」に対する視点がより増えてくるため，「食」へのより豊かな心情が築かれるのではないか。また，中学年以降に，他教科で食に関する知識を学習する際にも，低学年の生活科で，植物に関わる内容だけでなく，幅広い内容で食に関わっておくことで，生きてくるのではないだろうか。「食育」は，生涯にわたって行われるべきものであり，生活科で食育を行っていく際にも，上学年へのつながりを意識する必要があると考えた。

また，先ほども述べたが，子どもたちが，食に対して望ましい心情をもつことができれば，それを望ましい食習慣を身につけることにつなげていくこと

が必要であると考える。

そして，生活科における「食育」の目標を達成することが，活動の中で関わった「自分と身近な人々，社会及び自然とのかかわりに関心をもつこと」や，「生命の尊さを実感する」こと，「自分の心身の成長に気付くこと」[18] といった，生活科が教科として目標にしていることへつながるのではないか。生活科で「食育」を扱うことで，その有効性を示していく必要があると考える。

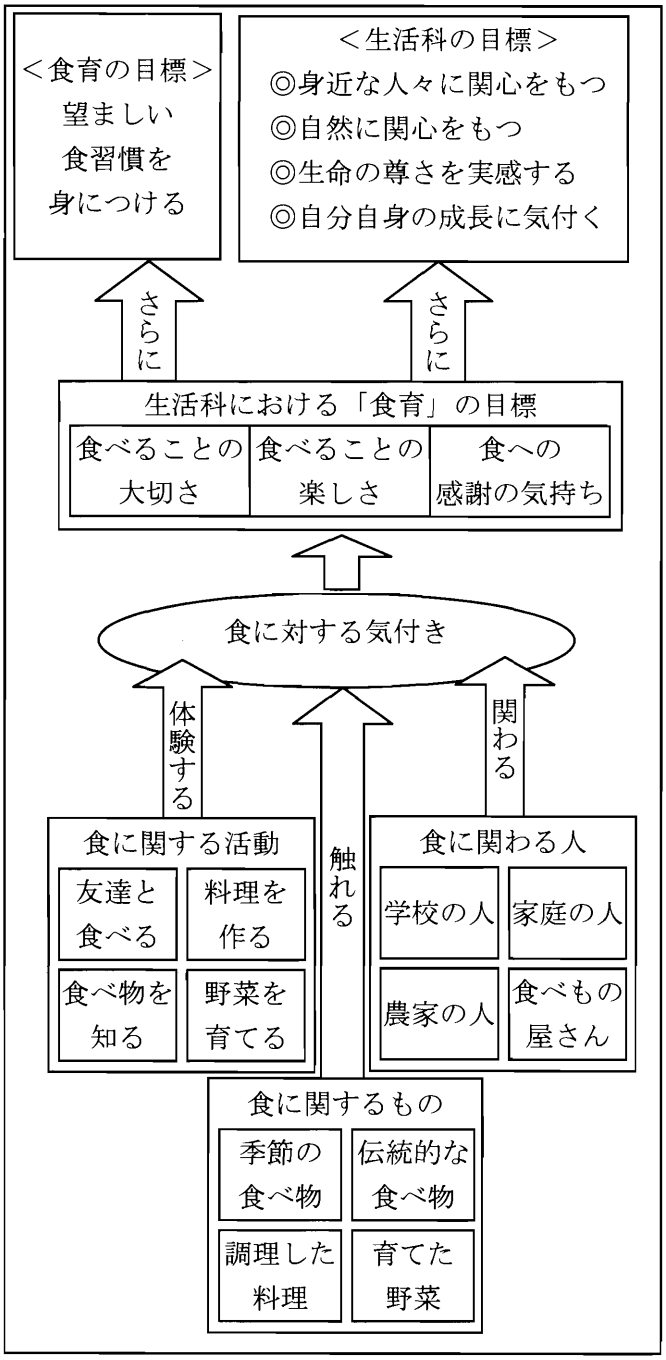

図６　生活科における「食育」の進め方モデル（案）

Ⅴ　今後の課題

今後は，本研究で明らかにした，生活科における「食育」で目指す目標を達成するためのプロセスが有効なのか，現実の場面に即して検討していく必要がある。そのために，実践事例分析や，授業実践を行っていきたい。そのなかで，具体的な手立てに関しても，検討していきたい。また，学習指導要領改訂の際に重要視された「道徳の時間などとの関連」[19] について，「食育」を通して考えていきたい。

【参考・引用文献】

1）文部科学省「小学校学習指導要領解説総則編」，東洋館出版，2008 年，p．24

2）内閣府「第２次食育推進基本計画」，2011 年，p．5

3）文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」，日本文教出版，2008 年，p．9

4）前掲書３），p．31

5）前掲書３），p．4

6）足立己幸，衛藤久美「食育に期待されること」『栄養学雑誌』(63)，2005 年，pp. 201-212

7）愛知県食育推進会議「あいち食育いきいきプラン 2015　～第２次愛知県食育推進計画～」，2011 年，p．33，参考にした。

8）文部科学省「食に関する指導の手引き」，2010 年，pp. 83-88

9）前掲書２），pp. 1－5，を参考とした。

10）前掲書７），pp. 33，を参考とした。

11）前掲書２），pp. 14-16，を参考とした。

12）前掲書８），pp. 11-13，を参考とした。

13）前掲書３），pp. 22-23，を参考とした。

14）野田敦典編『小学校学習指導要領の解説と展開生活編』，教育出版，2008 年，p．37

15）前掲書３），pp. 19-20，を参考とした。

16）文部科学省「小学校学習指導要領解説家庭編」，東洋館出版，2008 年，および，文部科学省「小学校学習指導要領解説体育編」，東洋館出版，2008 年，を参考とした。

17）奈良女子大学付属小学校学習研究会『学習研究』(453)，2011 年，p．53

18）前掲書３），pp. 5－11，を参考とした。

19）前掲書３），p．45

資料　質問紙

生活科における食育についての意識調査

愛知教育大学　生活科教育講座　野田敦敬

ご協力いただける先生方へ：私が修士論文指導をしている院生が、生活科における食育についての調査をしています。学校現場の実態を把握し、役立つ研究にするためにもぜひご協力いただきますようお願いいたします。なお、調査は全体をまとめて統計処理いたしますので、先生方にご迷惑のかかることは決してありません。

質問１　現代の子どもたちが抱えているといわれる以下の食に関する問題について、特に問題だと思うものを３つ選んで、（　）のなかに○を記入して下さい。

① 朝食を毎日きちんととっていない。　（　　）
② 食事の栄養バランスが悪い。　（　　）
③ 食事を平気で残す。　（　　）
④ 食事のマナーが悪い。　（　　）
⑤ 食事に感謝の気持ちを持っていない。　（　　）
⑥ 好き嫌いが多い。　（　　）
⑦ 他人と一緒に食卓を囲む機会が少ない。（孤食の問題）　（　　）
⑧ 食べ過ぎ、食べなさ過ぎである子どもが多い。　（　　）
⑨ 食に関する知識が不足している。　（　　）

質問２　下の①～⑫の食に関する能力・資質は、学校教育全体の中で、特にどの授業や時間に育んでいくべきだと考えますか。当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

	生活科	家庭科	保体	社会科	総合	給食
① 栄養バランスのとれた食事をとることができる。						
② 規則正しい食生活を実践できる。						
③ 生活習慣病や過度な肥満・痩身等を予防できる。						
④ 食の安全性について考えることができる。						
⑤ 食事を楽しむことができる。						
⑥ 食事を通して他人と交流することができる。						
⑦ 食文化の大切さを理解することができる。						
⑧ 食事のマナーを守ることができる。						
⑨ 食生活において「もったいない」意識を持つ。						
⑩ 地産地消に対する関心を持つ。						
⑪ 食に対する感謝の念を持つ。						
⑫ 食物の生産・流通・消費に対する関心を持つ。						

質問３　生活科での食育に関する授業経験についてお聞きします。

問１．生活科で食育に関する授業を行ったことがありますか。
当てはまる方に○をつけて下さい。　①ある（　　）　②ない（　　）

☆問１で「①ある」と答えた方は、次の問２と問３にもお答えください。

問２．食育に関する授業を行ったことがある生活科の内容は何ですか。
当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

(1) 学校と生活　（　　）　(2) 家庭と生活　（　　）
(3) 地域と生活　（　　）　(4) 公共物や公共施設の利用　（　　）
(5) 季節の変化と生活　（　　）　(6) 自然や物を使った遊び　（　　）
(7) 動植物の飼育・栽培　（　　）　(8) 生活や出来事の交流　（　　）
(9) 自分の成長　（　　）

問３．生活科で食育に関する授業を行うことで、子どもたちにどのような変化が見られましたか。以下①～⑦の質問に対して、当てはまるもの１つに○をつけて下さい。
また、その他にも特に大きな変化を見ることができた方は記述して下さい。

①健康や安全に気をつけて、規則正しい生活をすることができるようになった。
１とてもそう思う　２そう思う　３あまりそう思わない　４全くそう思わない

②地域の人々や場所に愛着を持つことができるようになった。
１とてもそう思う　２そう思う　３あまりそう思わない　４全くそう思わない

③マナーに気を使うことができるようになった。
１とてもそう思う　２そう思う　３あまりそう思わない　４全くそう思わない

④自然との触れ合いを深め、生命を大切にすることができるようになった。
１とてもそう思う　２そう思う　３あまりそう思わない　４全くそう思わない

⑤季節の移り変わりを生かして、生活を楽しくしたりすることができるようになった。
１とてもそう思う　２そう思う　３あまりそう思わない　４全くそう思わない

⑥自分の成長への喜びを感じ、支えてくれた人々に感謝の気持ちを持てるようになった。
１とてもそう思う　２そう思う　３あまりそう思わない　４全くそう思わない

⑦日常生活に必要な習慣や技能を身に付けることができるようになった。
１とてもそう思う　２そう思う　３あまりそう思わない　４全くそう思わない

その他（　　）

以上でアンケートは終わりです。ご協力いただきまして、本当にありがとうございました。